障害者へ理解深めよう

岐阜　車いすで大カルタ取り

車いすに乗ってかるたを楽しむ参加者たち＝岐阜市長良福光の岐阜メモリアルセンターで

障害の有無にかかわらず参加者全員が車いすに乗る「大カルタ取り大会」が三十日、岐阜市長良福光の岐阜メモリアルセンターふれ愛ドームであった。多くの人に障害者への理解を深めてほしい―。そんな思いを句にも込め、二十五年前から年一回開かれているイベントだ。

「コンサート　入れるように　なったけど　周囲総立ち　見えぬステージ」

会場のホールで句が読み上げられると、手動の車いすに乗った男女が一斉に走りだした。一メートル四方の段ボールでできた取り札の上に男性が車いすごと乗ると、司会の男性が「取りました！」と叫んだ。

句の種類は「いろはにほへと…」の順に四十四種類。岐阜市内の身体障害者支援団体「つっかいぼう」や岐阜聖徳学園大の学生ら実行委員会のメンバーが毎年アイデアを出し合い、作りためてきた。

「車いす　こわごわと行く　雪の道　あったらいいな　滑り止め」は、障害者の視点で感じる不便さを読んだ。「ちょい待てよかける言葉が分からない　何て言えば　助けられますか」と支援する側の戸惑いをうたったものもある。

岐阜地区の障害者団体の会員や岐阜聖徳学園大生、毎年この催しに協力している大垣桜高校の生徒ら百五十人が、「手動」と「電動」のグループごとに個人で取った枚数を競った。つっかいぼうの後藤篤謙副理事長（四五）は「（障害のある人とない人が）同じハンディで楽しんでもらい、障害への理解や垣根のない社会づくりにつながれば」と話していた。